研究ノート

ケインズ『確率論』解読（2）

清　水　玄　彦

はじめに

ケインズ『確率論』は数学的確率論の著作というよりかは、確率の論理学あるいは哲学の文献として位置付けることが適当であると考えられる。ケインズ自身は体系的な方法論を著していないため、個々の著作、評論およびエッセイからケインズ独自の思想を読み解かなければならない（たとえば『一般理論』第24章があげられよう）。

ケインズの哲学・思想的側面が幅広く記述されたものとしては「若き日の信条」というエッセイが非常に有名である。これは1938年9月9日にブルームズベリーのメモワール・クラブで発表され、ケインズが亡くなって3年後の1949年に「敗れた敵、メルヒオル博士」とともに『回想録二篇』として友人のデビット・ガーネットによって出版された[1]。

このエッセイでは、主としてG.E.ムーア（および著作『倫理学原理』）から受けた影響が論じられており、その中には『確率論』や『一般理論』の執筆に関わる内容が数多く散見される。本稿ではムーアから受けた影響とベンサム主義（功利主義）の否定という二つの点に着目して、ケインズの哲学・思想がどのように形成されたかを概観することにしたい。

1. ムーアからの影響

ムーアの名前は『確率論』の序文および本文でもたびたび言及されているように、ケインズに多大な影響を与えた哲学者の一人である。ケインズがケンブリッジ大学に入学した翌年（1903年）に、ムーアの『倫理学原理』が出版された。ケインズはこの当時の様子を次のように回想している。

「この本が今日の世代の人々に読まれているということは、聞いたためしがない。しかし、われわれに対してこの書物が与えた影響と、出版に前後して行われた議論とは、もちろん、他の何ものにもまして圧倒的に重要性を有していた。そしておそらく今もなおそうであろう。われわれは信条によって行動が左右される年頃であった。それは中年の人たちには忘れがちな若者の特性なのであるが、当時形成された物の感じ方と習性は、今なお顕著な形で生き残っている。この感じ方の習性、われわれ大多数に影響を与えたこうした習性こそ、このクラブを一個の集団たらしめ、その他の人々からわれわれを隔絶させているものに他ならない。そういう習性が、ともかく、われわれの性格の他の面での極端な相違を圧倒していた。」[2]

この文章で思い出されるのは、ケインズ自身の著作である『一般理論』の出版が経済学界に与えた影響である。P.A.Samuelsonは当時のハーバードでの様子を次のように述べている。

---

[1] Keynes（1972）訳書511ページ。
[2] Keynes（1938）訳書567-568ページ。

「『一般理論』は、ちょうど南海の孤島の人たちを悪疫がおそうようないきおいで、三十五歳以下のたいていの経済学者をおかしていった。五十歳以上の経済学者は、まったくその病気に感染しないことが明らかになった。この両者の中間にある学者は、たいてい徐々にその熱病におかされはじめたが、自分たちの病状に気づかずにいるか、あるいは病気にかかっていることを認めなかった」[3]

『一般理論』が経済学に与えた影響を計り知ることは到底できることではなく、また本稿の主題でもない。ただし、同書第12章における「不確実（uncertain）」という言葉の解釈で『確率論』第6章を参照するよう指示している点に関しては、今後詳しく検討することにしたい。

ケインズは自身が『倫理学原理』から受けた影響の内容を次のように記している。

「ところで、われわれがムーアから得たものは、彼がわれわれに提供したもののすべてであったわけでは決してない。彼は片足を新しい天国の敷居にかけていたが、もう一方の足はシジウィックと、ベンサム主義の功利計算と、正しい行動の一般法則との中に突っ込んでいた。『原理』の中にはわれわれが全く注目を払わなかった一章があった。われわれはいわばムーアの宗教を受け容れて、彼の道徳を捨てたのである。実は、われわれの考えでは、彼の宗教の最大の利点の一つは、それが道徳を不要なものにしたことにあった。この場合「宗教」とは、自分自身と絶対者とに対する人の態度のことであり、「道徳」とは、外部の人間と中間的な存在とに対する人の態度のことである。」[4]

ここでは、ムーアの「宗教」（『倫理学原理』第6章）を受け容れて「道徳」（同第5章）を捨てた（discard）ことが述べられている[5]。第6章では「精神の状態としての善（goodness）」が論じられているのに対し、第5章では「行為の属性としての正（rightness）」が論じられている[6]。続けてケインズは以下のように述べている。

「さて大切なのはただ心の状態だけであり、勿論それはわれわれ自身と他の人々との心の状態であるが、主としてわれわれ自身のそれであった。こうした心の状態は、行動なり成果なり、あるいは結果とはまったく関連がなかった。それは時間を超越した、熱烈な、観照（contemplation）と交わり（communion）との状態にあり、事の「あと」「さき」とは多分に無関係であった。またその価値は、有機的統一の原理に従って、全体としての事物の状態によって決定され、分析的に部分に分解しても無益であった。」[7]

ムーアが第6章で述べたことは「それ自体で価値があるものは何か」という問題であり、ここでは人間の行動やその結果（帰結）は関係がない。有名な「善とは何か」という問いに対して、ムーアは「善は善である」と答え、「善はいかに定義されるか」という問いに対しては「定義できない」とした。ケインズはこのことを次のように論じている。

「どんな心の状態が善であるかを、われわれはどうやって知ったのか。それは直接吟味すべ

[3] Samuelson（1946）p.187.
[4] Keynes（1938）訳書569ページ。
[5] discardという単語をいかに解釈するかという（訳語の）問題もある。福岡・早坂・根岸（1983）254-257ページ、および塩野谷（1983）を参照。
[6] 清水（2000）28ページ。
[7] Keynes（1938）訳書569ページ。

き問題であり、それについて議論することは無益で、議論することすらできない、分析不可能なまったくの直観の問題であった。」[8]

つまり、ケインズはムーアの直観的議論を受け入れ、善の定義についての議論は「自然主義的誤謬（naturalistic fallacy）」と見做していたことがわかる。

2. ベンサム主義の否定と『確率論』

ケインズは1906年から1914年にかけて、余暇の時間のほとんどを『確率論』の執筆に当てたとされる[9]。ケインズは『倫理学原理』第5章を受け入れられない理由の一端を以下のように説明している。

「ムーアの書物の重要な目的は、心の状態の属性としての善さ（goodness）と、行動の属性としての正しさ（rightness）とを区別することにあった。彼にはまた、行為の一般的規則の正当化を扱った一節がある。正しい行為に関する彼の理論において、確率に関する考察が演じている大きな役割が、実のところ、私が多年確率の問題の研究に余暇のすべてを費やすに至った重要な原因であった。つまり私は、ムーアの『倫理学原理』とラッセルの『数学原理』と双方の影響を同時に受けて、この主題について筆を執ったのである。」[10]

『確率論』第26章「確率の行為への適用」で、ケインズは不確実な将来の帰結について、数学的期待値あるいは予想確率が常に存在することを前提に議論するムーアの第5章に賛成できないことを述べている。さらに、ベンサム主義の功利計算も否定している。

ベンサムは、幸福が快楽と苦痛とで定義されるとした。そして、ベンサムは行為の影響を受ける人々の全体の幸福を増大させる、あるいは不幸を減少させる行為を善と定義し、その逆を悪とした[11]。これが功利性の原理であり、ベンサムは幸福の量が多ければ多いほど良いという「最大多数の最大幸福」という考え方に行き着くことになった。

この快楽の総量を計算するにあたり、確率や将来の可能性をも考慮する必要が出てくる。ところがケインズは、将来の出来事は必ずしも数値化できるとは限らないと考えていたため、計算可能性を前提とする功利主義は捨て去らなければならなかった。

『一般理論』において、ケインズは古典派批判を展開しているが、これは古典派経済学におけるベンサム的な功利計算を否定することに関係している。近代経済学の諸理論は基本的に（広い意味での）功利主義の伝統の上に成立していると考えられる[12]。経済学が想定する行動主体は利己的（合理的）に行動し、各々の幸福感を最大化することを目的とする。この幸福感を効用（関数）として表現し、社会全体の効用を最大化することを考える。これはまさに最大多数の最大幸福に他ならず、関数として定式化することは功利主義そのものである。ベンサム的な功利計算では、将来における結果が計算可能であり、そこでは不確実性が排除されてしまう。必ずしも計算可能ではない将来の期待や不確実性を重要視したケインズにとって、功利主義を前提とする経済理論は作り変えなければならなかったと考えられる。

---

[8] Keynes（1938）訳書570-571ページ。
[9] Skidelsky（1983）訳書248ページ。
[10] Keynes（1938）訳書580ページ。
[11] 品川（2020）81ページ。
[12] 佐伯（1980）56-57ページ。

おわりに

本稿では、主にムーアによるケインズへの影響について概観してきた。ケインズはムーアの「宗教」、すなわち直観を受け容れつつも、ベンサム主義は否定した。ケインズは優れた直観によって、当時の経済に見事に当てはまった経済モデル（『一般理論』）を提示することに成功した。

一方で、不確実性を有する将来の事象に関する計算可能性について、ケインズは否定的な考えを持っていた。これにはケインズの確率に対する考え方が色濃く反映されている。二つの事象ＡとＢについて、ＡはＢよりも確率（または蓋然性）が高いと言った場合、それはＡがＢよりも起こる確率が高いことを意味するのではなく、Ａを支持する根拠がＢを支持する根拠よりも多いことを示しているに過ぎない。したがって、ケインズの確率概念は、結果の予測ではなく、根拠と結論との関係を判断するものである[13]。つまり、前提と結論との間の論理的関係を示すのが確率であり、統計分析の基礎と考えているわけではない。したがって、（頻度論的確率に依拠する）ベンサム的功利計算は対象外となる。

ケインズの理論体系は、科学方法論からの考察も重要である。中でもポパーは主著『科学的発見の論理』およびそのポストスクリプトにおいて、ケインズの確率概念を入念に検討していることが知られている。今後は『確率論』を第1章から精読していくことに加えて、ポパーによる批判的検討も併せて検討していきたい。

引用・参考文献

Bentham, J.（1780）*An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, London: T. Payne and Sons.（中山元訳『道徳および立法の諸原理序説』ちくま学芸文庫、2022年）

早坂忠（1983）「ケインズの社会思想と国家観」『季刊現代経済』No.52, pp.54-74.

福岡正夫・早坂忠・根岸隆（1983）『ケインズと現代』税務経理協会

Keynes, J.M.（1921）*A Treatise on Probability,* Macmillan.（佐藤隆三訳『確率論』東洋経済新報社、2010年）

Keynes, J.M.（1938）“My Early Beliefs,” in Keynes（1972）.

Keynes, J.M.（1972）*Essays in Biography*,（1st edition 1933）, The Collected Writings of John Maynard Keynes Vol. X, Macmillan.（大野忠男訳『人物評伝』東洋経済新報社、1980年）

Keynes, J.M.（1973）*The General Theory of Employment, Interest and Money*,（1st edition 1936）, The Collected Writings of John Maynard Keynes Vol. VII, Macmillan.（塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』普及版、東洋経済新報社、1995年）

佐伯胖（1980）『「きめ方」の論理』東京大学出版会

Samuelson, P.A.（1946）“Lord Keynes and the General Theory,” *Econometrica*, 14（3）, pp.187-200.

清水幾太郎（2000）『倫理学ノート』講談社学術文庫

品川哲彦（2020）『倫理学入門』中公新書

塩野谷祐一（1983）「ケインズの道徳哲学―『若き日の信条』の研究」『季刊現代経済』No.52, pp.75-92.

Skidelsky, R.（1983）*John Maynard Keynes – Hopes Betrayed 1883-1920*, Macmillan.（宮崎義一監訳『ジョン・メイナード・ケインズ I・II』東洋経済新報社、1987/1992年）

[13] Skidelsky（1983）訳書250-251ページ。